1 インタビュー

基盤研究から、事業・社会に役立つ研究所横断のR&D成果の商用化開発を積極的に推進

次世代ネットワークのアーキテクチャや通信トラヒック・品質技術といった基盤研究から、NTTの12研究所を横断したR＆D成果の商用化開発の推進まで、事業・社会への貢献に向け広範囲なR＆D活動を推進するNTTサービスインテグレーション基盤研究所（以下、SI研）の最近の取組みについて、黒川章所長にうかがった。

日本電信電話㈱
サービスインテグレーション基盤研究所
所長　黒川 章氏

4つのプロジェクト組織が、基盤研究から商用化開発まで幅広いR&D活動を推進

――3月5日に研究開発体制強化に向けた組織再編の発表があり、4月1日より新体制に移行することとなりましたが、改めてSI研の組織構成及び主要ミッションからお聞かせください。

黒川　4月1日のR&D体制再編に伴い、NTT研究所の各開発プロジェクトを個別に支援するミッションを担っていた開発マネジメントSEプロジェクトが、新設の「ソフトウェアイノベーションセンタ」に移ったため、現在は図1に示すように4つのプロジェクトからなっています。私どもは、NTT研究所を横断する活動をミッションとし、研究開発戦略立案から基盤的な研究、事業会社と連携した研究開発成果の商用化及び展開、さらには大学連携の推進までを主要ミッションとしています。

図1　サービスインテグレーション基盤研究所の組織構成

公共サービスのICT化を支える技術の研究開発を推進する「SクP」

――各プロジェクトの研究開発の概要をお聞かせください。

黒川　パブリックICTソリューションプロジェクト（SクP）は、セキュリティ技術を応用し、安心・安全に個人情報を流通できる社会インフラの実現を目指し、公共サービスのICT化を支える技術の研究開発を推進しています。図2に示すように、高齢者の方やICTに詳しくない方でも安心・安全に利用できる、セキュリティと利便性のバランスのとれた電子行政サービスや医療・ヘルスケアサービスの実現を目指しています。後続の各論の頁でご紹介するように、多くの導入実績を誇るICカード「ELWISEカード」の後継カードの展開に今年度は特に注力する方針です。

また、医療ヘルスケア分野については、私どもが開発したハイセキュアな医療情報を扱うEHR（Electronic Health Record）基盤や、健康情報を扱うPHR（Personal Health Record）基盤に関し、これまでの実証実験を踏まえ、本当に役立っているのかをしっかりと検証していきたいと思います。

さらに、防災に関する研究開発にも注力したいと考えています。2009年に京都大学防災研究所の林春男教授との共同研究をまとめた書籍『しなやかな社会の創造』の続編として、東日本大震災を契機に防災力の検証

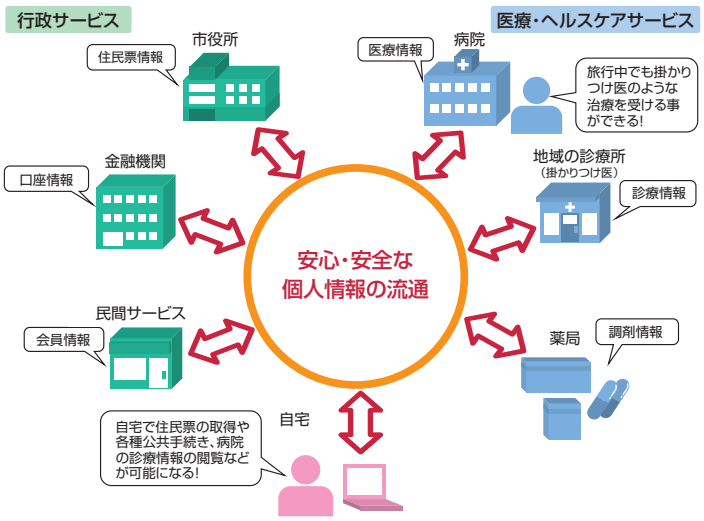

図2　パブリックICTソリューションプロジェクトの取組み

及びコンセプトワークからやり直して取りまとめた、『しなやかな社会への試練』がこの3月に、日経BP社から発行されました。これを踏まえ、例えば大規模災害時にも本当に役に立つ情報共有の仕組みなど、防災に関する研究開発を加速したいと考えています。

ポストNGNや新しいトラヒック理論の研究開発も推進

――他の3つのプロジェクトでは今年度どんな研究開発に注力されるお考えですか。

黒川　次世代ネットワーク方式SEプロジェクト（S方P）では、ポストNGNに向けたネットワークデザインのビジョン策定やFMCを含めたM2M、環境負荷を低減するためのグリーン・ネットワーク（省電力化）、大規模災害時を想定したネットワークの高信頼化など、将来を見据えた戦略的なネットワークデザインの策定に注力していきます。また、海外キャリアと連携した研究開発や国際標準化活動への積極的な取組みを通し、グローバルな視点でのネットワーク・アーキテクチャの実現にも取り組んでいきます。また、少し先の研究開発テーマですが、モバイル網がLTEからLTE-Advancedと広帯域化が進むと、膨大なトラヒックが流れますので、モバイルバックホールである基地局間の固定網の増強をどんな技術を使ってどの程度まで行うかという議論が出ています。

また、情報流通トラヒックサービス品質プロジェクト（S流P）では、昔ながらの品質トラヒックの基盤技術の研究開発を行っていますが、昨今、大規模トラヒックデータ（ビッグデータ）というのが注目を集めていますので、そういう技術を品質トラヒックの分析に応用できないかということでトライしています。さらに従来のトラヒック理論とはまったく異なり、生物学、社会科学（経済学など）、数学（積分幾何など）、物理学（統計物理学など）といった周辺領域の要素も取り込んだ「学際的ネットワーク科学」という革新的な研究を私どもの斎藤洋上席特別研究員が立ち上げています。

――SビPの取組みは、一昨年の12月号でご紹介しましたが、最近はどのような活動に注力されていますか。

黒川　事業会社とのリエゾン機能と大学連携の推進ということで取組みに大きな変化はありませんが、大学連携として現在10大学と国立情報学研究所と包括連携による共同研究を推進しています。現在は、包括連携先の共同研究の数を増やすことより、共同研究の質を高めることに注力しています。

グローバルで活躍できる研究者の育成にも注力

――最後に、研究者への期待感を含めた抱負をお聞かせください。

黒川　三浦社長は、4つのキーワード（グローバル化、コンバージェンス、クラウドコンピューティング、マルチデバイス）を掲げていますが、研究所も海外企業との共同研究の場に積極的に派遣するなどグローバルで活躍できる研究者の育成が重要だと思います。また若い研究者には、課題を見つけるところ、つまり何のために研究するかに目線を移して取り組んで欲しいと思います。私は、着任してからの半年間、各プロジェクトとビジョンを議論してきましたが、明日の目標ではなくさらにその先の目標、ビジョンを一緒に描いていくことと、個々の研究者に生き生きと仕事をしてもらうためにどうしたらいいかという2点に留意して取り組んでいきたいと思っています。

――本日は有り難うございました。

（聞き手・構成：編集長　河西義人）